

世界を変えよう基金報告書

団体名:インドワークキャンプ団体 namaste!

活動内容:インドのハンセン病コロニーにおいてワークキャンプ活動を実施し、回復者の社会的尊厳の回復と経済的自立を促進すること。

活動期間:2025/03/01~2025/03/23

活動場所:インド西ベンガル州ビシュナプールコロニー
インドジャールカンド州6つのコロニー

参加者一覧

	氏名	所属、学年	メールアドレス
1	水谷安津紗	人文・文化学群人文学類4年	
2	関根健史	国際総合学類4年	
3	新藤海斗	医学群医学類2年	
4	坂岡華	国際総合学類2年	
5	賀川七海	芸術専門学群1年	
6	中村穂希	理工学群社会工学類2年	
7	佐藤ゆうき	医学群看護学類4年	
8	馬場ちひろ	国際総合学類3年	
9	松田莉緒	筑波大学 理工情報生命 学術院 生命地球科学研究群 生物資源科学学位 プログラム 1年	
10	宮地有沙	筑波大学生命環境学郡生物資源学類4年	
11	野上航希	総合学域群第一類一年	

12	西澤諒	工学システム学類2年	
13	栗山晃生	比較文化学類一年	
14	須藤秀英	国際総合学類1年	
15	高野真由香	国際総合学類2年	
16	長井絢香	生命環境学群生物資源学類4年	
17	赤堀健晴	国際総合学類1年	
18	西川美優	生物資源学類3年	
19	吉本光希	国際総合学類	
20	勝原経太	社会学類	

VSU班に関する報告

プログラム実施に至った経緯・目的

私たちはインド国内のハンセン病回復者とその家族に対する差別解消を目的として活動している。ハンセン病コロニーの人びとは社会から差別をされてきた歴史があり、現在でも貧困に直面し進級・進学が難しく、定職に就くことができていない人がいる。また、主に高齢世代では、物乞いで生計を立てている人も少なくない。私たちはワークキャンプを実施することで、外部の人が抱く差別意識とハンセン病コロニーの人々自身が持つ被差別意識の解消を目指している。今回の渡航では前回渡航での村人への被差別意識に対する調査を踏まえて、VSUでのキャンプを閉じるべきかを判断し、その準備に向けたキャンプを行った。

各プロジェクトについて、今回実施した主なプロジェクト(以下PJ)は、教育PJ、交流PJ、家屋&水場修繕PJである。

○教育PJ

【内容】

これまでのワークキャンプにおいて、コロニーの子供達の教育状況において、勉強に意欲的でなかったり、学校を中途退学したりしている子供がいること、大学に進学する子供がほとんどいないことが懸念として挙げられていた。今回は理科実験教室の実施とコロニーから大学に進学した2人の若者による講演会を行い、子供達が勉強や進学に意欲的になるきっかけを提供できるようにした。さらにNPO法人わびねすの協力のもと、子供を持つ各家庭に子どもの学習状況を把握するためのリサーチを行った。

【結果】

糸電話とスライムを作る実験教室ではコロニー内外問わず、みんな楽しんでいる様子だったが、原理を説明する場面ではちゃんと聞いている子供がいる一方であまり聞いていない子もいて、全員が理解できているわけではなさそうだった。子供たちが自分の夢を発表する場面ではみんな自信を持って発表していて、周りも暖かい雰囲気で見守っている様子が印象的だった。

【今後の方針】

VSUでのキャンプは閉じる方針であるため、今後namaste!として、教育に関わる大掛かりなPJをやる予定はないものの今回の調査内容はわびねすや現地のカウンターパートナーと共有して活用していく。



○交流PJ

【内容】

VSUでの長期滞在が最後となる可能性が高かったため、コロニーの人にとっても村人にとっても思い出に残るようなキャンプにしたかった。そこで一緒に参加できるイベント(サッカー大会、チャイパーティー)を通じてキャンパーと村人の交流を図るとともにコロニーの人の生活に密着したビデオ(村人史)を作成して、namaste!内外の人々に我々の活動を知ってもらおう手がかりとする。

【結果】

サッカー大会は特に子供達が喜んで参加してくれ、女の子や大人の方たちも座りながら見守っていて、素敵な時間だったと思う。チャイパーティーでは村人の家のキッチンを借りて大人数のチャイを用意したり、足などが悪くてなかなか家から出られない村人には自分からチャイを届けにいくことで普段関わる機会があまりなかった村人との交流ができたことも良かった。村人史ではハンセン病患者の話や過去の差別の内容まで含めて深く聞くことができた。過去の辛い体験を思い出して、話している途中で涙を流す村人もいたのが印象的だった。

【今後の方針】

ビデオに収めた内容は編集してSNSなどに載せる予定である。多くの人に過去の差別の内容や現在の暮らしの様子が伝わるような映像を作成したい。



○家屋&水場修繕PJ

【内容】

2023年9月から継続していた家屋修繕PJがインド政府による支援へと引き継ぐことになったため、そのことを村人に説明した。また、代わりにコロニーの公共物のインフラ整備を行うことになり、そのニーズ調査と準備を行った。

【結果】

家屋修繕については村人ミーティングで全体に向けて説明したが、納得していない村人もいる様子が伺えたので追加でのフォローアップが必要だと考えている。また、コロニー内のニーズ調査の結果、共用の水場の修繕を行うことになった。水場は今、水捌けが悪く、床に苔がむして大変滑りやすい状況であり、過去に死者も出たほど危険な状態であるため、床材の変更、水路、ウォータータンクの改善を行うことで子どもや高齢者、そして家事をする女性たちも安全に使用できるようにする予定である。

【今後の方針】

水場については現地のカウンターパートナー、コロニーの若者と連絡をとりながら次回渡航での完成を目指して国内での準備を進めていく。また管理の方法などを村人に共有し、彼ら自身で管理できるような仕組みを整える予定である。



【さいごに】

VSUでのキャンプは水場の工事が完成する目処が立てば、次回で閉じる予定である。今までVSUとの関係性を築き上げてきた先輩方、キャンパー、VSUの村人、全ての人にとって良かったと思えるような終わり方ができるようにしたい。

リサーチ班に関する報告

リサーチに至った経緯・目的

2024年夏キャンプにてVSUコロニーを閉じることになり、ナマステの新しい活動地を決めるために、リサーチを行った。ナマステが最もインパクトを与えられるハンセン病コロニーを、インタビューを通し決定することで、これから長期間滞在するワークキャンプ地を決定することを目的としている。具体的には、コロニーの人々が持つハンセン病の被差別意識をなくすために、日本人キャンパーがそのコロニーに赴き、インフラ整備や交流PJなどを行うなどである。よって我々は、リサーチの中で、もっとも被差別意識をもつ村人がいるコロニーを探すことに重きを置き今回のリサーチを行った

キャンプ地決定の評価基準

キャンプ地決定に際し、我々ナマステメンバーは、1インタビュー結果2主観的判断の二つを採用した。1インタビュー結果に関しては、被差別意識や村の状況に関する質問を行い、結果が最も悪いところに優先順位を高く設けることにした。2主観的判断については、キャンパーが純粋に訪問し村人と交流する中で、「ここでキャンプをしたい」「またこの村人と会いたい」と思えるキャンプ地であることにも重きを置いた。今後キャンプを実行していく中で、キャンパーが楽しめ渡航者が定期的に集まることも重要な要素であると考えたからである。

リサーチ方法・内容

リサーチ方法について

NGO団体atmaswabimanから事前に、距離・治安などを考慮したうえでピックアップしてもらった6つのコロニー（最初は4つの予定だったがのちに二つ追加された）に訪問しリサーチを行った。性別・年齢・ハンセン病感染者の有無などが均等に分かれるように村人12人ほどをピックアップし、3人一组3グループに分かれ、1グループ4人ずつインタビューを実施した。基本的に我々が英語で質問したものを、NGOのスタッフにベンガル語に翻訳してもらい、英語・ベンガル語間の対話で行い、得られた答えをメモ・録音した。

リサーチに際し使った質問は以下である

被差別意識に関する質問

村外の人が週に何回程度コロニーに来ますか

それはどういった目的で来ますか

村に住み続けたいと思いますか

それはなぜ

自分がコロニー出身者であることをどう思いますか？

ハンセン病コロニー出身であるがゆえに差別されたり嫌な思いをしたことはありますか

村の状況に関する質問

この村の良いと思う点はどのようなところですか

あなたが他の村人のためにしていることや協力しあっていることはありますか

コロニーが抱える大きな問題は何だと思いますか
村がより進歩していくためには、どのような施策が必要だと思いますか

しかし4つのコロニーリサーチを終えたところで、リサーチ結果が当初の想定と違い、コロニー決定が困難になった。具体的には、すべての被差別意識に関する質問に「ない」と答えていたり、村のニーズも「家を直してほしい」「収入を増やしてほしい」など被差別意識以外の部分で需要が高かったりなどである。しかし、NGOのスタッフと話したところ、「彼らは潜在的なところで被差別意識を感じているため直接的な質問をしてもみんなないと答える。もっと間接的な質問をすべき」と助言をいただいた。そこで、リサーチを重ね村人と実際に関わった上で見つけた知見とそのアドバイスをに基づき、質問内容を以下に変更した。

被差別意識に関する質問

村外の人が週に何回程度コロニーに来ますか
それはどういった目的で来ますか
村に住み続けたいと思いますか
それはなぜ
自分がコロニー出身者であることをどう思いますか？
ハンセン病コロニー出身であるがゆえに差別されたり嫌な思いをしたことはありますか
+
あなたは外部にこのコロニー出身であることをいいますか？
あなたは問題なく、チャイを買うことができますか？
今までハンセン病差別を受けたがゆえに、物が売れなかった経験はありますか？
今までハンセン病差別をしている・受けてる人を見たことはありますか？

この変更に加え、村の状況に関する質問は省略した。また、調査地も当初の予定から二つコロニーを増やし(gandhigram・BRTC)、すでに回った四つのコロニーからJamadoba以外をもう一度訪問しインタビューを行った。(jamadobaは全会一致で被差別意識を感じなかったため)

各コロニーの概要

Bankati/Durgapur

- コロニーの概要
 - 川を挟んだ二つのコロニーで交流が盛ん。
 - 近くに炭鉱があり、大気汚染が目立つ。
 - Bankatiでは月に2回会合を実施。
 - 人口: Bankati 70人、Durgapur 78人
 - 回復者: Bankati 7人、Durgapur 8人
 - 教育:
 - コロニー内に小学校はない。
 - 高等教育への進学率は5%。
 - 第二世代の退学率は50%。
- リサーチ結果
 - 印象的な回答:

- 「ほとんどの患者は悲しみを感じ、何もできないように感じている」(35歳男性)
- 「職場でハンセン病コロニー出身だと伝えたら距離を置かれた」(21歳男性)
- 「コロニーの近くに住む人は私がハンセン病コロニー出身だと知っていて、無視することがあると思う」(24歳男性)
- 「炭鉱の冷却が村の一番の問題」(多数)
- キャンパーの印象
 - コロニーと村の境界が曖昧、コロニー内の高低差が大きい、大気汚染がキャンプ実施の懸念材料。
 - DurgapurはBankatiliに比べて被差別意識に関する回答が少なかったが、両コロニー間の距離が近く交流も盛んなため、片方のみでのワークキャンプには懸念が残る。
 - Durgapurで「ほとんどの患者は悲しみを感じ、何もできないように感じている」と話す人がいたのが印象的。回復者は差別を差別と認識しないことで受け入れ、前向きに生きてきたのかもしれないと感じた。
 -

Jamadobha

- コロニーの概要
 - リーダーは女性。
 - TATAからの支援がある。
 - 人口:15世帯36人
 - 回復者:7人(36人中)
 - 後遺症のある人:7人(36人中)
 - 就労:日雇い、物乞い、ドライバー(月収3,000~5,000ルピー、約5,000円~8,400円)
- リサーチ結果
- キャンパーの印象
 - フレンドリーで穏やかな雰囲気。
 - 学校がコロニー内にあり、道も比較的整備されている。
 - 他のコロニーに比べて被差別意識が低く、問題点としてインフラ関連の要望が多かったため、namaste!としてできることは少ないと判断。



BMP

- コロニーの概要
 - 人口:45世帯202人
 - 回復者:23人(202人中)
 - 後遺症のある人:15人(202人中)
 - 職業:日雇い、私企業勤務、物乞い(月収3,000~4,000ルピー、約5,100円~6,800円)
 - 教育:
 - 60%の子どもは5km先の私立学校、40%は2km先の公立学校に通う。
 - 土地:鉄道沿いにあり土地所有権がないため、鉄道会社から立ち退き勧告が出ている。政府が移住先を検討中で、2年ほどで全住民が移住予定。
- リサーチ結果
 - 印象的な回答:
 - 「トト(三輪タクシー)に乗る時、本来より高い料金を言われる」(45歳女性、回復者)
 - 「あっちへ行けと言われる」(45歳女性、回復者)
 - 「髪を切ってくれない」(50歳女性、回復者)
 - 「ハンセン病コロニー出身だと知ると陰口を言ったり無視したりする人がいる」(26歳男性)
 - 「娘が結婚できない」(80歳女性)
 - 「この村にいて差別されることを今も恐れており、親戚にも自分がハンセン病コロニー出身であることを言っていない」(20歳女性)
 - 「ハンセン病を怖がられると思うから外に出るのは嫌だ」(35歳女性、回復者)
- キャンパーの印象
 - 回復者だけでなく若い世代も差別に直面し、被差別意識を強く持っている印象。行動範囲が広がり、外部の人との関わりが増えることで差別をより感じているのではないか。
 - 大通りに面しているため、日本人が出入りしていることが分かりやすく、外部へのインパクトは大きい。
 - 村が二つに分かれており、コロニー内の移動が大変。

- 土地問題があり、立ち退き後も活動を継続できるか不明。



Premnagr

- コロニーの概要
 - 1972年に設立されたコロニー（政府による設立との情報あり、未確認）。
 - 人口:30世帯93人
 - 回復者:11人(93人中)
 - 後遺症のある人:10人(93人中)
- リサーチ結果
 - 印象的な回答:
 - 「友達と普通に話せるようになりたい。コロニー出身と言うだけで、ハンセン病患者のように思われる」(22歳男性)
 - 「過去に家族や住んでいた村から差別を受けていた」(60歳女性、回復者)
- キャンパーの印象
 - 村人全体が人懐っこく明るい印象。
 - 建物や道路周辺は比較的きれいで、緊急性の高い課題は少ないかもしれない。
 - 中心地から離れており、やや閉鎖的な雰囲気。



BRTC

- コロニーの概要
 - BMPの近くに位置する。
 - 入り口にゲートがある。
 - 住民のための工場があったが、コロナ禍後に閉鎖。
- リサーチ結果
 - 印象的な回答：
 - 「工場の再稼働を願っている」(60歳男性、回復者)
 - 「ハンセン病にかかった時、家族が家に入れてくれなかった。外部の人は私に触らなかった」(50歳女性、回復者)
- キャンパーの印象
 - 被差別意識はあまり見受けられなかった。多くの人が元工場勤務者で、工場の再建を望む声が多い印象。
 - BMPに近い。
 - コロニーの入り口に門があり、境界線が明確。
 - 使われていない公共トイレや家屋があった。



Gandhigram Karkendra

- コロニーの概要
 - コロニーのすぐ隣に大きな池がある。
 - 年に一度、住民がお金を出し合って祭りを開いている。
 - 人口:54人(うち回復者18人)
- リサーチ結果
 - 印象的な回答：
 - 「昔は差別がたくさんあったけど、モンデル(活動?)を作ってから村に人が来るようになった」(60歳男性)
 - 「私を見ると避ける人もいる。ハンセン病回復者だと分かると、近くに座らなかったり口を覆ったりする人もいる」(40歳女性、回復者)
 - 「ここに住んでいる人全員がハンセン病回復者ではないけれど、ここ出身というだけで距離を感じる」(24歳女性)
 - 「1か月前、回復者の村人が政府の病院に行った時、ハンセン病回復者

だという理由で拒否され、仕方なく私立病院に行った」(50歳女性、回復者)

- キャンパーの印象

- きれいな家が多く、インフラ面だけ見れば整っている印象。
- 住民が主体的に祭りを開いており活気があり、村全体に協力的な雰囲気がある。
- 大通りに面しており、人が集まりやすい。
- 村や人の雰囲気が良く、空き家もいくつかあり、コロニーでの宿泊やワークキャンプの実施がしやすそう。
- 回復者だけでなく若い世代からも被差別意識を感じた。現在も被差別意識を持っているのは若い世代の方が多い印象。生活圏の違いによるものか？



キャンプ地決定までの流れ

ここでは、活動地の選定にあたり、複数の候補地について多角的な検討を重ね、最終的にGandhigram Karkendraを選定するに至った経緯を詳述する。

まず、初期候補地として挙げられたBRTC及びJamadobhaについて検討した。両地域においては、被差別意識が比較的希薄であると判断したため、全会一致で候補から除外した。

次に、残りの候補地について、以下の通り詳細な評価を実施した。

- **BMP:** 当初、被差別意識が比較的高く、有力な候補地の一つであった。しかしながら、現地調査の結果、2年以内の立ち退き計画が存在し、主な活動内容がデータ入力作業となる可能性が高いことが判明した。これにより、長期的な視点での活動には適さないと判断し、候補から除外する結論に至った。
- **Bankati 及び Durgapur:** 両地域について検討した結果、Durgapurはnamaste!による介入の必要性が相対的に低いと判断された。加えて、両地域に共通する課題として、深刻な大気汚染が懸念材料として挙げられた。これらの点を考慮し、両地域を候補から除外した。
- **Prem Nagar:** キャンパーの主観ではあるが雰囲気は良好であった。その一方で、既にある程度の自立が見られることから、本事業のような外部からの介入による付加価値やインパクトが限定的になる可能性があり、最終候補地としての評価は慎重な判断を要する状況であった。

- **Gandhigram Karkendra:** 道路に面した立地による外部へのインパクトや、住民の被差別意識の高さといった点で、活動の趣旨に合致する要素が多いと評価した。

上記評価に基づき、最終候補地をPrem NagarとGandhigram Karkendraの2箇所に絞り込み、比較検討を行った。その結果、以下の理由から、Gandhigram Karkendraを活動地として最終的に選定した。

- 明確な被差別意識の存在: 被差別意識が現存している点が重視され、namaste!の活動目的の一つである被差別意識を解消することに合致している。
- 外部へのインパクト: 道路沿いという立地が、活動をコロニー外の周囲の人々に認知してもらう可能性が高いと期待された。
- 安全性の確保: キャンパーにとって安全面における重大な懸念材料がなかった点も、決定の重要な要素となった。
- 事業展開の柔軟性: Prem Nagarで想定される事業内容は、Gandhigram Karkendraにおいても実施可能であり、事業展開の柔軟性が確保されていると判断された。

結論 以上の比較検討プロセスを経て、安全性、外部へのインパクト、活動対象としての適切性（被差別意識の高さ）、及び活動展開の柔軟性といった複数の評価軸に基づき総合的に判断した結果、Gandhigram Karkendraが本活動の実施地として最も適しているとの結論に至った。